

野球超え 地域支え合う 球団に

もう一つの 箕島

下

部」(有田市)。甲子園で名をはせた故・尾藤公さんが率いる箕島高校野球部の卒業生たちが、30年ほど前に立ち上げた。

始まりは、硬式の草野球チーム。

社会人野球クラブチーム「マツゲン箕島硬式野球」雇用先の「企業」、チーム



球場近くの地域で清掃活動をするマツゲン箕島の選手たち。有田市宮崎町

本拠地・マツゲン有田球場は、海を望む有田市の男浦地区にある。170世帯余りの住民は、高齢化が進んでいる。

南海トラフ巨大地震の被害も想定される地域。選手たちは、津波避難路などを定期的に清掃している。

「ものすごい助かった」



マツゲン箕島の地域貢献活動について話す男浦地区の田中区长(左)と監督の西川さん

は、前市長が箕島高校野球部出身だったことも追い風になった。

マツゲン箕島野球部は、NPO法人「和歌山箕島球友会」の活動だ。チームの活動費を得るため、法人として市内の体育施設の運営管理を市から受託している。さらに、有田市のふるさと納税の制度を利用して、全国から球友会に寄付できる制度も整備されている。1千万円近くになる年もあるという。

若者定住・活動「助かる」 県外からも注目

現在の主要スポンサーで、近畿でスーパードを展開するマツゲンとのつながりも、野球部の縁だ。卒業生が同社にいて、西川さんが新しく迎える選手の就職先を相談したことがきっかけだった。

かつて、選手の所属先企業はバラバラだった。だが、いまは全員がマツゲンの正社員だ。

選手らは20代前半から中盤で、多くが県外出身者。全員が有田市内の寮やアパートで暮らす。1年で10人前後、選手は入れ替わるが、常に約40人の若者が市内に住み登録している。

引退した選手が、有田市に定住するケースも少なくない。2024年に現役を引退し、今はマツゲンでバイヤーをしている青木雄大さん(27)は奈良県出身。和歌山で知り合った女性と結婚して、有田市内に新居を建設中だ。

「いい環境で野球をさせてもらった。今後は恩返しという気持ちで働き、後輩を応援したい」

有田市の玉木久登市長(60)は「若者がどんどん流出する中、選手たちが市内に住居を構え、地域活動などで逆にこちらを支えて頂いている」と喜ぶ。

「箕島や尾藤さんという名前があつてこそ、ここまで大きくすることができた」そんな西川さんには、忘れられない思い出がある。

06年、全日本クラブ野球選手権で初めて優勝したときのことだ。チーム発足時から支援してくれていた尾藤さんに電話で伝えると、「すぐに帰ってこい」と言う。

ナイターが終わった後で、栃木県から夜行バスに飛び乗った。

明け方に尾藤さんの自宅を訪ねたところ、一晩中起きていた恩師は涙を流しながら抱きしめてくれた。

「お前も優勝監督になったんだな」

高校野球史上に残る名監督から、後進を育てるといふバトンを託された西川さん。チームは野球という枠を超え、母校とは違った形で地域を支える役割を担うまでに成長した。

「尾藤さんが繰り返し言っていたのは、自らを犠牲にしても次につなぐことの大切さ。僕もそれを若い選手に伝えていきたい」それが尾藤さんへの恩返しだと思っている。

(白木琢歩)



甲子園球場のベンチで指示を出す箕島監督の尾藤公さん(左)と現役時代の西川忠宏さん。西川さん提供